

日本資本主義と公害：足尾鉍毒事件を中心に（公害と教育(特集)）

著者	橋本 哲哉
雑誌名	社会教育研究
巻	12
ページ	43-55
発行年	1972-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/7034

日本資本主義と公害

— 足尾鉍毒事件を中心に —

橋 本 哲 哉

日本資本主義と公害

——足尾鉍毒事件を中心に——

橋 本 哲 哉

目 次

- はじめに
- (1) 公害の定義
 - (2) 公害と教育
- 一 日本資本主義の確立と公害
- (1) 公害の歴史
 - (2) 日本資本主義の特質と公害
- 二 足尾鉍山と鉍毒事件
- (1) 事件のあらまし
 - (2) 鉍毒被害と足尾の銅生産
- むすびにかえて

はじめに

(1) 公害の定義

現在の日本のおおくの地域は、様々の公害によってよごされてい

る。とくに一九五〇年代後半以後の、政府による「高度成長」政策は急激に日本の空を、水をよごしたようである。各地に公害反対の住民運動がおこり、マスコミが大きくとりあげ、あたかも公害が現

在の社会にはじめておこった現象のように思えるほどである。今日のように公害が全社会的問題となり、国民ひとりひとりに直接かわる問題となったという意味でははじめてのことであろう。ここでは現在の公害の問題を考える手がかりとして、公害とは何かという問いを出発点として、公害を歴史的に考察し、公害が現在の問題にとどまらないことをのべてみよう。

公害とは何か、公害の定義といっても、それはなかなか簡単ではない。これといった模範回答もない。このこと事態は、公害に対してまだ科学的分析がはじめられたばかりであることをしめしているといえよう。公害問題の解明はたんに自然科学者のみにまかされてよい問題ではなく、それに本格的なメスをいれるためには全分野の科学者、さらに国民が参加しなければならぬと考える。ここでは代表的ないくつかの考え方を例にとりあげて簡単に検討しておきたい。

まず政府がもうけた公害審議会は次のようにのべている。

「一般に公害と呼ばれている現象がどのような範囲内容のものであるかについては、必ずしも定説というべきものがない。その内容としては、公害は人間の活動の結果として生み出される一般公衆や地域社会に有害な影響を及ぼす現象であり、その影響は、人間の身心や生活環境に対する影響のほか、動植物や物的資産に及ぼす影響を含むものであって、因果関係の立証や受忍限度の判定に困難が伴うことなどが特徴であるといえよう」^(註一)

さらに「公害対策基本法」では次のように定義している。

「この法律において、公害」とは事業活動その他の人の活動に伴って生ずる相当範囲にわたる大気の汚染、水質の汚濁、騒音、振動、地盤の沈下（財物の掘採のための土地の掘さくによるものを除く。以下同じ。）及び悪臭によって、人の健康又は生活環境に係る

被害が生ずることをいう」^(註二)

この二つの定義の特色は公害を具体的な用語で示し、そのことによって公害の内容を限定していることである。さらに公害を「人間の活動の結果として生み出されるもの」とし、また「人の活動に伴って生ずる」ともいって、どの社会の固有の現象であるが、どのような矛盾の所産であるかをあいまいにしている点がもうひとつ特色である。とくに前者については「因果関係の立証」に困難が伴うとして、都留重人氏は次のような定義を提出されている。

「公害とは――

(一) 技術進歩がますます生産の社会的性格を強めつつある段階において、したがって一経済主体の外部から受ける影響が大きくなり、それが外部に与える影響も大きい段階において、

(二) 経済主体の私企業的な自主自費の原則をつらぬくかぎり、

(三) 集積の便すなわち外部経済を利用しようとする積極的動機もつたって、集積傾向は必ず強まることだし、

(四) 外部に及ぼす悪影響は、最少限の防除がおこなわれるだけで、

周辺地域に集積して、量の質への転化を生むが、

(五) その結果については、個々の経済主体との因果的結びつきが実証困難な場合が多くて、個々の経済主体は責をのがれ、

「外部」すなわち通常は不特定多数の企業ないしは個人、例外的には特定の企業ないしは個人にたいし、「実害を生む事態」^(註三)

ひとつの事象について定義をすることは、それ事態が科学的に厳密であることが大切であるが、同時に一読してわかるような平易な内容もあわせもつことが重要だと思ふ。その意味からいえば、都留氏の定義は厳密であるが、理解するに少し付がおれる。そのうち(一)から(四)まではおおよそ、公害が資本主義社会の必然的な矛盾である

ことについての、(4)以後はその現象のおこす主体についてのべているとみてさしつかえなからう。

郁留氏の定義のうち(1)と(4)の部分をもう少し具体的にほつきりさせたものとして、庄司光、宮本憲一両氏による定義がある。

「公害は、資本主義の生産関係に附随して発生する社会的災害だといえる。それは、資本主義的企業、個人経営の無計画な国土、資源の利用と社会資本の不足、都市計画の失敗を原因として発生し、農民、市民の生産や生活を妨害する災害である。したがって、公害は階級対立のあらわれである。加害者は、主として資本家階級であり、被害者は主として、農民、労働者階級である。」^(註1)

この定義では公害の発生原因、公害の加害者と被害者についてより明白になされている。その意味では現在、もっとも高い水準の定義といえよう。しかし、公害について科学的分析がおこなわれはじめたばかりであるので、やがてその進展によって、さらに内容の高い定義がなされるであろう。

さて、ここでとりあげる問題との関連でいうならば、公害が資本主義に固有な社会的災害とする意味についてを、検討の対象としよう。以下、のべるところであるが、簡単にまとめると次の点が課題となる。それは、公害が発生する仕方が資本主義の各発展段階によってことなることである。日本の資本主義社会、とくに戦前のそれは、資本主義確立期、独占資本段階以前と以後とに大きく二つに区分され、その発展段階、資本主義社会としての特質は分けて

(一) 日本資本主義の確立と公害

(1) 公害の歴史

はじめにふれたように、ここでは戦前の日本資本主義の特質を考

考えられるべきである。ということとは、公害をたんに現象面にとらえるのでなく、その公害がおこった特定の資本主義社会の段階、特質、矛盾との関係で考えてみる必要がでてくる。そうすることによって、なぜ公害がおこったのかという問題も、たんに「資本家の対策がなかったから」、「國が無計画だったから」という答えだけに終らないのではないかと考える。この点を、戦前の日本を例にとりて少し考えてみることにしよう。

(2) 公害と教育

前節で公害の定義をしつつ、公害をとりあげる方向についてのべた。その意味を教育の問題からとらえなおして補足しておく。

公害問題が自然科学・社会科学・人文科学の全分野にとって境界領域のない、その意味ではすべての科学にとって対象となりうるものであることはさきに若干のべた。したがって教育の場でもとりあげるとするならば、そのすべての場とかかわるということはいうまでもない。しかし、ここでは社会科学、とくに歴史とのかかわりを重視すべきであることを主張しておきたい。公害が資本主義社会の個有な現象であることがその第一の理由である。さらに、ひとくちに資本主義社会といっても、その発展過程があるわけであるから、その歴史の展開を理解しつつ、その一局面における公害の特色を整理することが重要である。このことを、公害問題を教育の場にのせるときにまず留意する必要がある。

えながら、戦前の公害の性格を論じてみることにしたい。

まず、戦前におこった(1)というより記録されているといった方が

より正確であるが、公害の略年表を次に掲げよう。戦前の公害については、その研究はごく一部の研究者によってははじめられたばかりで、したがって年表も不十分なものである。しかし、公害史の概略を知るには充分であろう。なお、年表は一つの工場、鉱山におこった公害を、そのもっとも代表的な事例をひとつだけとりだしたものである。足尾・別子・鈴木製薬所のように何年にもわたって何回も問題になったものも、その量的な意味は考慮にいれていない。

戦前の公害年表⁽⁵⁾

- 一八七八(明治一一)年 横浜・ガス工場のタールによる魚の被害。
- 一八八三(明治一六)年 東京・浅野セメントの粉じん被害。
- 一八八四(明治一七)年 兵庫・多木製肥所の悪臭。
- 一八九〇(明治二三)年 足尾鉍毒による渡良瀬川流域の大被害。
- 一八九四(明治二七)年 別子銅山の煙害。
- 一八九六(明治二九)年 日立・赤沢銅山の鉍毒。
- 一八九八(明治三一)年 尾西・一宮の繊維業による宮田用水の汚濁。
- 一九〇一(明治三四)年 兵庫・三菱製紙による加古川の汚濁。小坂鉍山の煙害。
- 一九〇六(明治三九)年 大阪・アルカリ工場の硫酸たれ流しの被害。
- 一九〇七(明治四〇)年 日立鉍山の煙害。
- 一九〇八(明治四一)年 東京・鈴木製薬所の味の素製造による塩酸ガスの被害。
- 一九一四(大正三)年 山口・日本製紙の廃水被害。
- 一九一八(大正七)年 岐阜・荒田川の新紙・製紙工場の廃水による汚濁。
- 一九一九(大正八)年 中央線・日野倉駅付近の機関車による煙

害。

- 一九二〇(大正九)年 神岡鉍山の鉍毒による神通川の汚濁。
- 一九二七(昭和二)年 筒中・セルロイド工場の煙害、廃水被害。東京・陸軍砲兵工廠の毒ガス被害。
- 一九二八(昭和三)年 東京・昭和肥料の廃水被害。
- 一九三七(昭和一二)年 日本亜鉛の煙害。
- 一九四〇(昭和一五)年 静岡・日本軽金属の粉じん被害。
- 一九四一(昭和一六)年 安中の煙害。国策バルブの廃水被害。

以上の公害の年表から、いくつか興味深い特徴をひきだすことができる。まず第一は、一九〇〇年代の後半を境として、それ以前にみられる公害の大部分が鉍山を中心に行っている点である。とりわけ日本における大規模な、しかも銅山にそれが集中していることに注目する必要がある。このことの意味については次章で検討することとなるが、一九〇〇年代の後半は一応、日本資本主義が確立した段階と考えるので、その確立の過程、仕方と特殊にかかわって発生した公害として考えておきたい。

第二は、一九〇〇年代の後半以後に発生した公害はとくに、第一次大戦中から戦後にかけてのそれは、都市の工場を中心におこっていることである。これはこの時期に重化学工業を中心に独占資本が確立したという日本資本主義の特質にかかわっている。また公害が大都市におこったことから、都市問題としてクローズアップされたことも同時に指摘することができる。しかし、その大部分は「産業公害」としての内容をもっているといつてよい。

第三は、太平洋戦争の段階に入ってから、公害の発生が予想以上にすくないことである。いわゆる総力戦の時期に国をあげて生産第一が叫ばれ、また実行されたにもかかわらず、わずかな事件が記録されているにすぎない。このことは実態として公害がなかったと考え

なすか、戦争進行の態度のうちに、この態度が、されていゝのか
検討を要するであろう。

以上、その特徴を概括的に述べた。もちろん、これ以外のものを
まだ指摘することができるであろう。しかし、ここではわれわれの
当面の課題を考えれば、とくに第一と第二の特徴を重視する必要が
ある。

公害が各段階の日本資本主義の特殊性と結合していること、いい
かえれば、特定の日本資本主義の発展段階の矛盾の露呈としての公
害の問題を考えることが重要である。その点をもう少し具体的に検
討するために、戦前における日本資本主義の特徴を整理し、そこで
発生した公害との関連を分析する手がかりとしよう。

(2) 日本資本主義の特徴と公害

戦前の日本資本主義の特徴をどのように理解するかは、戦前から
多くの議論のあるところである。しかし、ここではそうした内容を
筋道をたてて整理する余裕はもちろんでない、結論的な部分の見
解をのべるにとどめたい。

戦前の日本資本主義の特徴を考える前提として、まず次の二点を
明確にしておく必要がある。

その第一は、日本の資本主義社会はその出発点から一貫して欧米
の先進資本主義国の監視（それはあたたかい見守りでは決してない
ところの）の中で、そうした先進資本主義国に追随し、そのかたち
づくる世界体制と密接不可分な中で形成されたことである。世界の
資本主義諸国の中で、もっとも後進の資本主義国であるという点で
ある。このことが日本資本主義の特徴を考える第一の前提である。

第二は、第一の点とも関連するが、日本資本主義は、その生まれ
た当初から天皇制という独自の政治機構をもち、その天皇制のもと

に後進的発展の道歩んだといふことである。このことは日本資本
主義が生れながらに侵略的であつたこと、政治機構が天皇制といふ
前近代の色彩をもつていたこと、これらに对照的にその発展の速度
が超近代的であつたことなどの特色にいひかえることができる。

さて、以上の二点を前提として、次に日本資本主義の特徴を公害
問題となるべくかかわるような形で整理してみよう。

まず第一は、日本は後進資本主義国であつたため、その発展過程
— 本源的蓄積期・産業資本期・独占資本期 — が、もっとも先進国で
あるイギリスと比較して、大きくことなつたといふことである。と
くに、資本主義社会の確立期、完成期といわれる産業資本段階にお
いてその差がはなはだしい。そのもっとも大きな相異点は、イギリ
スが資本主義社会を作りだすために、道具に工夫をこらし、機械を
発明し、蒸気機関に代表される動力機を発明するといつた、実に長
い時間かかつて、自力で、一步一步階段を踏みしめていつたのにくら
べ、日本は三段も四段もとびこえて資本主義社会を作りあげたこと
である。とくに機械に例をとれば、日本は先進国で工夫された機械
をお金を出して買い、国内に工場を作り、据えつけることで資本主
義的生産をおこなうことが可能だつたのである。こうした日本の資
本主義社会への歩みには、いくつかの必要な条件があつた。まず國
家が資本主義社会を作りあげる決意をし、お金もち、外國から機
械・技術を買い、国内に工場を作る指導をおこなうことであつた。
こうした事情から作られたのが「官營模範工場」である。さらにこ
の工場は、最初から大規模なものであることも重要であつた。先進
国と比較するとイギリスとは、世紀内外、他のドイツ、アメリカ等
とは半世紀内外の時間のおくれをとつていたわけであるから、こう
した先進国と肩をならべるためには、最初から大工場での生産が必
要であつた。そうして、三井、三菱、住友といつた「大政商」にそ

の大工場を安く売る等の保護をして、それらを中心に資本主義社会を生みだしていった。また、工場を作るだけにとどまらず、そこで働く労働者をいそいで作りだす必要もあった。そのため、これまで日本の産業の中心であった農業に目をつけ、地租改正などの一連の農業政策をつうじて、農民を労働者にかえていく作業をおこなったのである。このようにして、簡単にいえば日本資本主義は先進国におかれて出発したがゆえに、おいつくために国家の指導のもとに無理をしてその発展を上げたといつてさしつかえなからう。

第二の特質として、日本資本主義は一貫して軍事部門に関連した産業に力を注いだことである。このことは天皇制の性格とも結びついているが、ひとつは、先進国から侵略をうけないような国力をつけることが常に念頭におかれていたこと、国内に限られた資源では資本主義の急速な発展がおぼつかなく、いきおい、近隣のアジア諸国に侵略したことに深くかかわっている。この政策がいわゆる富国強兵であった。さらに先進国との関係でいえば、こうした軍事力の増強とともに「極東の憲兵」としての座を与えられ、先進国（戦前においてはとくにイギリス）に従属した立場で、日本はみずから生きる道をもとめたのである。

さてこうした事情から、とくに国内の産業部門のうち、鉱山・製鉄・機械工業といった重工業、軍事産業の急速な発展が日本資本主義にとって至上命令となったのである。もう少し具体的にいえば、石炭産業、銅山業、製鉄業、造船業、砲兵工廠などの軍事産業での生産の近代化にまず力が注がれたわけである。さらに、そうした産業部門の発達を基礎として、化学工業部門へとその中心を移行させることとなった。

以上二つの特質から、日本資本主義の確立期の性格を考えてきたが、それを簡単にまとめると次のようになるであろう。

日本は後進資本主義国として出発したため、先進国に追いつくため、国家の援助によって、軍事部門を中心とした産業に大工場大経営をつくりだし、それを大政商にあたえ、それらを保護することを通じて、いそいで無理をして資本主義社会を完成したといえる。このような特質をもつ日本資本主義社会の確立（完成）した時期は、日露戦争の直後、だいたい一九〇〇年代の後半と考えることができる。^(註)

さて、こうした日本資本主義の、とくに確立期の問題を公言とかかわらせて考えるために銅山業を例にとって考えてみることにしたい。

戦前において、銅は鉄とならんでもっとも重要な軍需品原料であった。銅の軍需力にしめる比重は現在とは比較にならないほど重要な位置をしめ、銅を征するものは世界を征す、といわれたほどであった。したがって、政府はその生産・確保に常に力点をおいていた。戦前の銅生産の動きは第一表を参照してほしい。戦前の銅生産のピークは表にはあらわれないが、一九一七（大正六）年の一〇八、〇三八トンと一九四三（昭和一八）年一一一、三六〇トンである。

第1表 戦前の銅生産の展開

	銅生産量 (トン)
1875(明8)年	2,399
80(13)	4,669
85(18)	10,541
90(23)	18,115
95(28)	19,114
1900(33)	24,317
05(38)	35,495
10(43)	49,324
15(大4)	75,416
20(9)	67,792
25(14)	66,482
30(昭5)	79,034
35(10)	70,914
40(15)	99,840
45(20)	40,205

註) 出典 『現代日本産業座
II (鉄鋼業付非鉄金属
業) 統計表より作成

第2表 重要鉾業権者の産出銅量 (1908年)

鉾業権者	産出銅量 千斤	対全国比 %
古河鉾業	15,350	22
藤田組	12,130	16
三菱鉾業	9,392	13
住友鉾山 (上四社計)	8,908	13
	45,780	66
全国合計	69,537	—

註) 出典『日本鉾業誌』(東京鉾山監督署編—1911年刊) 附表

第3表 重要鉾山の産出銅量 (1908年)

鉾山	産出銅量 [全国比] 千斤
小坂鉾山(藤田組)	12,000
足尾鉾山(古河鉾業)	11,673
別子鉾山(住友鉾山)	8,760
日立鉾山(久原鉾業)	3,169
尾去沢鉾山(三菱鉾業)	2,300
(上五山合計)	37,902[55%]
全国合計	69,537

註) 出典 第2表と同じ

以上銅生産の発展と公害との関係について一般的にのべてきたが、この点をもう少し具体的にみてみよう。日立鉾山の煙害、別子鉾山の煙害など多くの事例があるが、最も大規模で、しかも資料の豊富なために、古河鉾業の大鉾山である足尾銅山を中心に、足尾鉾毒事件を例にとりあげて分析することにしよう。

助者が第一次大戦中、後者が第二次大戦中であるが、このことは銅と戦争との関係をもっとよくしめしているものといえよう。
明治政府は成立後ただちに銅生産を確保するために小坂・生野・院内・阿仁・荒川諸鉾山を佐渡・三池などと共に官有にした。そしてその官営鉾山に英・米・仏・独の技師や技術、機械を入れて近代化をはかり、その後、きわめて安い価格でそれらの諸鉾山を三井・三菱・住友・古河・藤田などの政商に与えたのである。こうして一部の資本家の手に独占的に与えられた大鉾山を中心にして、日本の銅山業は急速に発達した。一八八〇(明治一三)年には江戸時代の最大生産量を上まわり、さらに一九〇〇年代後半にはその一〇倍となるほどに発達した。こうした動きにつれ、一部の銅生産家と手になる大鉾山に銅生産が集中した。第二表は、日本の銅生産量の三分の二を古河・藤田組・三菱・住友のたった四社で独占していることをしめしている。また同時に、第三表をみてもわかるように、

そのうち上位の五鉾山が、生産の五割以上をしめている。こうした大資本、大鉾山を中心として、日本の銅生産が進んだといふことはさきにのべた日本資本主義の特質をもっとよく表現しているといつてよいであろう。
一方、こうした五つの銅生産における大鉾山のひとつがさきにしめた公害年表の中に顔をだし、さらに亜鉛を生産していた三井の神岡鉾山を含めて大資本、大政商がすべて公害の発生とかかわっていたことに注目する必要がある。これらの事実、公害をたんに資本主義社会の矛盾のひとつとして一般的にうまれるものとして定義するにとどめてはならないことを物語っている。すなわち、戦前のこの時期においては、大資本、大政商をつうじて、急速に、いいかえれば無理やりに資本主義化をすすめた矛盾がその大資本、大政商の下に、公害という現象となつてはつきりあらわれたとみるべきである。

(二) 足尾鉾山と鉾毒事件

(1) 事件のあらまし

足尾鉾山の鉾毒事件は日本資本主義が生み出した公害第一号ともいへべきもので、戦前の公害史を語る場合にぬかすことのできない代表的存在である。ここではその事件のあらましについてまずのべておきたい。

足尾鉾毒事件が公けの問題になりはじめたのは一八八〇（明治一三）年ごろから、渡良瀬川の流域においてであった。

渡良瀬川は利根川の支流のひとつで、日光の中禅寺湖の南にみなもとを発している。川は足尾の町をとり、桐生、関東平野の足利・佐野をへ、茨城の古河をとって利根川に合流している。古くからよく洪水をおこしていたが、それによって流域はかえって地味ゆたかであった。そればかりでなく魚も多く、水運の便も供していた。こんな川を回想して一人の農民は「渡良瀬川は両沿岸の土地と人民とを興し、富まし、にぎわし、栄えしめてくれた川であった。……生命の親であり源であった」（「鉾毒事件の真相と田中正造翁」）とのべているほどである。

ところが、この川に異変がおき、魚が浮きあがり、水をのむと下痢をし、洪水ではこぼれた土地では植物が枯れるということになった。こうした事態を知った栃木県令（現在の県知事）の藤川為親は「渡良瀬川の魚族は、衛生に害あるに依り、一切捕獲することを禁ず」という布告をだした。こうしているうちに鉾毒は一層はげしくなりつづけた。

鉾毒事件が深刻化したのは一八八九（明治二二）年からで、この

年の洪水は被害が大規模であった。翌年以後、沿岸の農民たちは合しこの被害の源は足尾鉾山にあることから村会、県会で損害の賠償と足尾の鉾業停止を要求するといった運動をおこしていった。

この足尾鉾山の歴史は一六一〇年ごろまでさかのぼるが、江戸時代の末には廃鉾同様になっていたものを一八七七（明治一〇）年に古河市兵衛が四万八千余円で手にいれた。彼の手によって、その後足尾は息をふきかえし、めざましく発展し、やがて東洋一の銅山といわれるほどになった。市兵衛は死ぬまで頭にチョンマゲをのせていたといわれるほど見かけは古風であったが、一早く近代技術を取り入れたり、仲々の企業家であった。とくに政治の権力者と密接に結びつき、政府の援助・保護を有効に引き出していた。鉾毒問題を管理する農商務大臣陸奥宗光の息子を養子として、のちに古河鉾業の社長にすえ、それを補佐したのはのちに内務大臣となって鉾毒反対運動を取締った原敬であった。こうした古河と足尾の歴史は、日本資本主義の特質をよくしめしているといえよう。

沿岸の農民たちはその沈黙土の分析を農科大学（現在の東京大学農学部）の古在由直助教授に依頼し、足尾鉾山が直接の原因であることをつきとめ、社会にアピールしようとした。しかし政府は耕地に被害があることは確かだが原因がわからなかつた。足尾鉾山では新式機械を入れて鉾毒の流出防止につとめているとか、矛盾しているがあらゆる口実をもちだして足尾鉾山の責任をさげようとした。政府がなぜ農民の生活を破壊してまで古河鉾業をかばったかはこれまでのべてきたことで十分であろう。

政府・古河鉾業が一体となった方向、それはさしづめ富岡鉾兵と

「足尾銅山鉍毒加害の儀に付質問書」を提出することによってはなれた。田中正造は一八四一年に今の栃木県の名主の子に生まれ、性格は剛強不屈で青年時代、幕末、明治維新の動乱の中で度重なるきびしい試験とたたかってきたえられた。維新後には国会開設運動に参加し、改進黨に加盟するなど地方政界で活躍をはじめた。そして第一回総選挙で栃木県第五区から代議士となり、以来連続六回、十年間議員活動を続けた。その間の彼の活動の中心はほとんどすべて足尾鉍毒事件であった。この田中正造によって、はじめて事件が中央にあきらかにされたが、その後運動がただちに高揚はしなかった。そうした中で古河は被害民とのあいだに示談をはかった。地元民の一部は古河のつけた新式防止器の効果を信じつつ、田地一反に付八圓という安い示談金で、今後一切足尾鉍山には苦情をいわないという契約書を認めた。

しかし、一八九六(明治二九)年の渡良瀬川の大洪水は農民の期待を一瞬にしてふきとばした。被害は一府五県の一二万戸、一〇万余町歩にわたった。がまんしきれなくなった農民はむしろ旗を押し立て、みずから作った「鉍毒悲歌」をうたい、政府に請願のため翌三月に東京へむかった。沿道での警察の妨害によって、出発時五千人だった農民のうち東京・日比谷公園に到着したのは数百人であったが、時の農商務大臣榎本武揚との面会に五十人を送り込み、口々に鉍業停止を訴えるにいたった。農民のこうした運動は各地の知識人・社会主義者・キリスト教徒・学生をゆるうごかした。片山潜、内村鑑三、安部磯雄、河上肇、石川啄木らはのちに何等かのかたちでこの運動をうけとめたといわれている。

政府は運動がたかまるなかで、ようやく重い腰をあげ、古河に対し鉍毒除害の工事をしよう三七項目の命令を下した。古河は昼夜兼行で、この工事をやっていた。しかし、翌一八九七(明治三〇)年八月の洪水はまたもや、そうしたおさなりの防衛工事の効果のないことを暴露した。農民は鉍業停止請願書を提出すると共に第二回の上京行動をおこなった。ところがその翌九八年にも大洪水がおこり、九月末第三回の上京請願がくわだてられた。参加者は一万人をこえ、警官の妨害を実力でこえ、東京に足をふみいれたところへ、田中正造がかけてつけた。この頃の田中は農民とともに鉍毒反対運動を組織し、さらにその代表者として議会にのぞみ、熱烈な発言をして政府を追いつめるという活動をしていった。そのため、農民の上京行動に対して「議会をつうじて努力するから、今回は私にまかせて村にかえてほしい」と説得した。農民は不満をもちながらそれにしたがった。しかし、田中正造ひとりの力では、議会の中で政府、資本家を相手として、それを打ち破るにはあまりに壁が厚かった。このことは二年後の一九〇〇(明治三三)年の川俣事件ではっきりと認められた。

その年の二月、被害民は四度目の死にもぐるいの請願を計画し、三千余人がその隊伍に加わった。しかし利根川の北岸の川俣にさしかかると数百人の警官がサーベルを突きたて農民におそいかかった。相当の重傷者がで、またおもだった者が逮捕された。この川俣事件がおこると田中正造はおりから開会中の第一四議会に矢つき早に質問書をだし、政府を攻撃し、警官の暴行をのろった。しかし政府は一片の冷ややかな「答弁せず」という回答をしたにすぎなかった。こうした結果と、議院内での孤立した活動に絶望した田中は議員を辞職した。そしてその一九〇一(明治三四)年暮、明治天皇への直訴という非常手段によって世論に訴えるという行動にでた。

この直訴文は当時「万朝報」の記者であった幸徳秋水が、田中の要望によって一晩でかきあげた漢文調の美文であった。

こうした田中正造のぎりぎりの行動は「農民とともに生きる」という鉱毒事件をつうじて彼がえた信念のようなものであった。その後、足尾鉾山に対する対策によって鉱毒は表面から一応姿を消していったが、谷中村を廃村として遊水池を作るといふ谷中村事件という形となってさらに続いた。ここにも田中はかけつけその反対運動の先頭にたった。

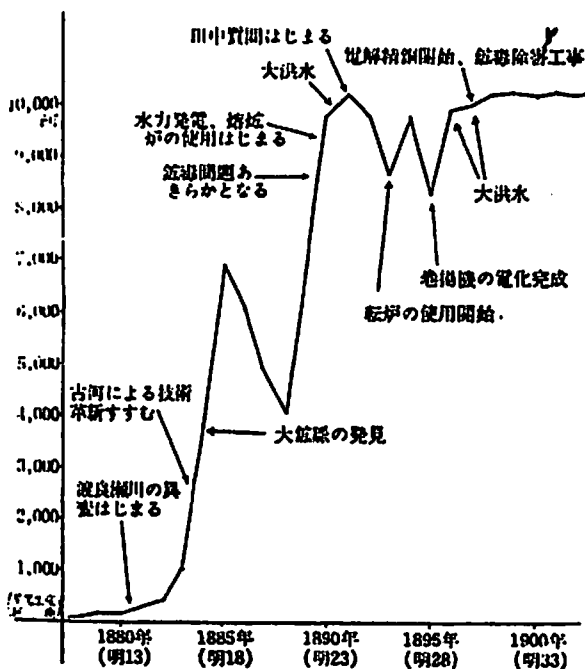
この谷中村事件を最後として、一応、戦前の鉱毒事件・鉱毒反対運動は終わった。ところが、足尾鉾毒事件は完全に過去のものとはなっていない。一九六六（昭和四一）年秋の国会でまた足尾の鉾毒問題がよみがえった。一九五五年ごろから瀬良瀬川の流域に被害が目だちはじめたのである。となると、田中正造が「いたずらに富国強兵ゆめみつづ國の根本玉なしにすな」と詠んだ歌が今もまた現実となつてよみがえったことにならう。

以上が、足尾鉾毒事件のあらましである。事件のなかで田中正造を少し大きくとりあげすぎたきらいもあるが、また事実、田中の役割が大きかったのであるが、この事件をとおして、次の点はすくなくともみておく必要がある。それはまず、戦前の日本資本主義の確立する時期において、政府と大資本家がしっかりと手を結び、富国強兵のもとに生産をすすめたことである。さらにそうした生産第一主義の矛盾が鉾毒流出という公害を生みだし、そのしわよせが農民に集中したことである。この事件から、いわば農民を犠牲にした富国強兵という実態をみる事ができるといえる。

(3) 鉾毒被害と足尾の銅生産

前節で、足尾鉾毒事件のいきまをのべたことによつて、足尾の銅

第1図 足尾鉾山の産出銅と足尾鉾毒事件



註) 『日本鉱業誌』、『公害原論Ⅰ』(宇井純)、『古河市兵衛翁伝』(五日会刊)などを参考として作成

生産の問題について少しふれたが、その点をもう少し具体的にここでみてみることにしたい。

まず足尾鉾山の産出銅の推移を第一図をつうじてみておこう。

一八七七(明治一〇)年に古河市兵衛が足尾を買収した前後の産銅は一〇万斤(約六〇トン)ぐらいで、ほぼ江戸時代末のそれと大差はなかった。江戸時代初期の記録によると、延宝四年(貞享四年迄(注一六七六年〜一六八七年)ハ一ヶ年約二百四十万斤ノ産銅アリ)となつていたので、その後の衰退ぶりがうかがえる。しかし、古河の手につつてから後、一八八二(明治一五)年ごろよ

り、生産量が急激に増加をみる。一八八四（明治一七）年には江戸時代の隆盛期を上まわり、さらに翌年には第一のピークとして、約七百万斤（約四千トン）の産銅を記録する。こうした生産の増加の背景には、第一には古河の手によって坑内の機械化がすすめられたことがあげられる。とくに、排水用の蒸気ポンプの設置がその中心であった。この時期迄の鉱山技術の中で、難問のひとつは坑内にわきでる水をどのように能率よく排水するかということであった。鉱山に対する排水のもつ意味は、その鉱山の地理的条件によって、排水量の多い坑、少い坑とがあり、単純に比較はできない。しかし、地下に鉱脈をおって掘り進むにつれてどこでも、地上への排水に頭を悩ませた。佐渡、三池などでは有名な囚人労働を使い、手桶で順々に上へくみあげるといふ方法をとった。この仕事は大変な重労働で、佐渡には死ぬまで地底で水汲みをした囚人の話が伝えられている。こうした人力にとつてかわろうとしたのが、まず蒸気ポンプである。これによって、排水の技術面での問題は、かなり解決されたが、したがって、採鉱の能率もその意味では大幅にあがったはずであるが、一方、労働条件の一層の悪化をもたらすことにもなった。それは地上からポンプを動かすために、湧水地点のポンプまで蒸気を送るわけであるが、それによってたゞでさえ地熱で熱い坑底が一層熱くなり「高島炭坑の惨状」として暴露された事件からもわかる様に労働者に大変な苦痛を与えることとなった。それはともかくとして、足尾鉱山への排水ポンプをはじめとした機械導入は、古河の手によって他鉱山にみられぬほど、力が注がれておこなわれた。簡単に比較はできないが、一九〇〇年代の後半を例にとると、足尾鉱山には二六台の排水ポンプが設置されていたのに対して、小坂鉱山二台、阿仁鉱山六台、日立鉱山七台というように非常に大きなちがいをみせている。第二の理由としては、一八八一（明治一四）年に

最初の大鉱脈の発見、一八八四（明治一七）年にはさらに大きな鉱脈を発見するといった探鉱への努力などがあげられる。

こうした生産の急上昇の中で、瀬良瀬川の異変が次第におこっていった。とくに一八八八（明治二一）年以後、大鉱脈の探鉱が進み、生産が増加する中で大洪水がおこり、鉱毒問題がはつきりしてくるのである。一八九〇（明治二三）年以後をみると、焙鉱炉の改良その他の技術改良をへながら、その生産量はほぼ一千万斤（約五千トン）を前後するといった動きを示している。これは次第に鉱毒事件がはつきりとし、田中正造の議会での追求などから、そう思い切つて生産増加をつづけることができなかったという状況なども影響していたであろう。一方、巻揚機の電化、電解精銅といった生産能率をあげる努力は続けていたが、鉱毒の発生に対する本質的対策は、一八九七（明治三〇）年頃まであまり熱心ではなかった。

田中正造は第一〇議会での質問の中で、農地の鉱毒の被害のうけ方が、①洪水時の逆流水という瀬良瀬川の二三口とよんでいり一三の枝川からの逆流水の被害、②破堤による田畑の荒地化、③用水地^点の三つをあげている。このうち①の洪水時の被害がもっとも大きかったことは、さきにのべたとおりである。この度々の洪水は、生産増加につれて、精錬用、坑木用に周辺の山の木を切ることがひとつにはその原因となっていた。さらに足尾の鉱石は地^中のものと少しちがってヒ素が入っていたため、精錬の際に亜硫酸ガスの中に有毒なヒ素が混入した。その影響で周辺の植物は枯れ、川の魚が死ぬという被害が、他鉱山よりさらにはつきりと生じたのである。こうした鉱毒に対して鉱山側は積極的な対策をしなかった。一八九七（明治三〇）年に政府のかなり厳格な除毒改善命令でやっと工事にのぞんだのである。この命令は主に沈澱池、ろ過池を建設することがそのおもな内容になっていた。しかしその工事の監督にあたった

東京鉱山監督署長の南掘三は実施にあたって手ぬきを認めたとわ
れている。その功績で明治末に、南は足尾銅業所長に採用されると
いったありさまであった。

こうしたことから、足尾銅山では生産増加のための技術導入、機

むすびにかえて

前章までにおいて、足尾銅毒事件をつうじて、戦前の日本資本主
義が確立する時期における公害の問題について分析してきた。日本
の資本主義社会は大鉱山・大工場を中心に、国家の援助のもとに強
力に、いそいで作りだされていったわけであるが、そうした日本資
本主義の特質が足尾においてその矛盾をはっきりとあらわしたとい
えよう。またその矛盾の犠牲が渡良瀬川流域の農民の双肩にのしか
ったといえよう。その意味では、農民は急激な資本主義発展の犠牲
者であったといえよう。しかし、足尾銅山において、その急激な発
展の矛盾は農民だけに負わされたわけではなかった。

前節において若干ふれたが、足尾において坑内の機械化が進む中
で、とくに蒸気ポンプの登場にあらわれた様に、労働者に対するし
わよせも、又同時に指摘しなければならぬ。この時期の足尾銅山
の坑夫は、他鉱山でも同様であるが、飯場頭とよばれる親方のもと
で、激しい労働・搾取の支配をうけていた。働けば働くほど借金の
ふえるようなシステムのもとで、常に監視をうけて働き、労働後も
飯場で不自由な生活をしいられた。また坑夫たちは自分たちの労働
が結果としては農民の生活をおびやかしていることを知る機会も与
えられていなかった。したがって、現在水保所の新日本窒素の一部
の従業員のように、抗議にきた農民に暴行を働くということとはもっ

械設置には多くの力をさき、事実その効果はあらわれて日本で有数
の鉱山となった、しかし。銅毒の対策に対しては熱心でなかった、
ということが出来る。足尾の生産第一主義の犠牲に多くの農民がさ
らされたのであった。

ろんおこなわなかったし、又逆に農民の抗議を支持して、足尾の中
で行動をおこすということもみられなかった。この一八九〇年代の
足尾銅山の坑夫たちは、いわば労働者としての自覚はまだ持てない
状況、それほど激しい搾取のもとにおかれていたといつてさしつか
えない。こうしたことから、銅毒事件のおこっている時期の坑夫
は、農民のうけた被害とはその質も内容もまったくことなつてはい
たが、やはり、日本資本主義の特質、矛盾から考えて「被害」をう
け、それなりに苦しみ、あえいでいたのである。

しかし足尾銅山の坑夫たちは農民のようにただちにではなかった
が、こうした支配、矛盾にたいして行動をおこした。それは有名な
一九〇七（明治四〇）年の足尾暴動である。この暴動ははじめは坑
夫たちの直接の支配者である飯場頭、親方にむけての対立行動とい
うかたちでおこった。この暴動が進むなかで、坑夫たちは次第に日
常の支配者は飯場頭であるが、そのうしろで、飯場頭をあやつって
いる本当の支配者である足尾鉱山・古河銅業所という資本の存在に
気がつくようになるのである。そして、それらに坑夫たちは行動の
目標をつつしはじめるのである。こうした坑夫たちの行動の先頭に
南助松などの坑夫がおり、銅毒事件の田中の役割を一部はたした。
この足尾暴動をつうじて、足尾の坑夫たちははじめて労働者として

の自覚を、一、よきになつたわけであるが、しかし、その時には、方の鉦毒事件の農民の行動はすでに退潮していた。

一九〇〇年代前後において、労働者と農民が一致して共通の目標にむかつて闘争をしたという事例はそう多くはない。足尾においても今のところそうした実態は証明されていないが、しかしだからといって、この時期の鉦毒事件に対する農民の、足尾暴動における労働者の、それぞれの闘争を過少評価することはできない。すくなくとも、足尾鉦毒事件を考える場合に、こうした足尾の坑夫の動きもあわせて考える必要がある。

註

- (1) 『現代資本主義と公害』 都留重人編（岩波書店）一―二頁。
- (2) 前掲書 二頁。
- (3) 前掲書 一四―一五頁。
- (4) 『恐るべき公害』（岩波新書）一三九―一四〇頁。なお最近、宮木氏自身によって、公害の定義についての再評価が『講座・現代日本の都市問題』（沙文社）第五巻公害 でおこなわれているので参照してほしい。
- (5) 『資料近代日本の公害』 神岡浪子編（新人物往来社）所収 六、公害年表飯島伸子 を参考として作成した。
- (6) 以上については詳述できないので、『講座日本史・6・日本帝國主義の形成』（東大出版会）所収 『日本資本主義の確立』石井寛治を参照してほしい。
- (7) 『日本鉦業誌』（東京鉦山監督署編―明治四四年）三八七頁。
- (8) 『資料近代日本の公害』 前掲 四八頁。

(9) 資料によると鉦毒事件の中に、八多から、…を採入していた。

（補註）産業公害とは、資本主義社会における諸産業の生産活動の過程から発生する公害である。その内容については『現代資本主義と公害』（前掲書）に解説があるので参照してほしい。

（一九七二年一月三十一日・金沢大学講師・経済史）